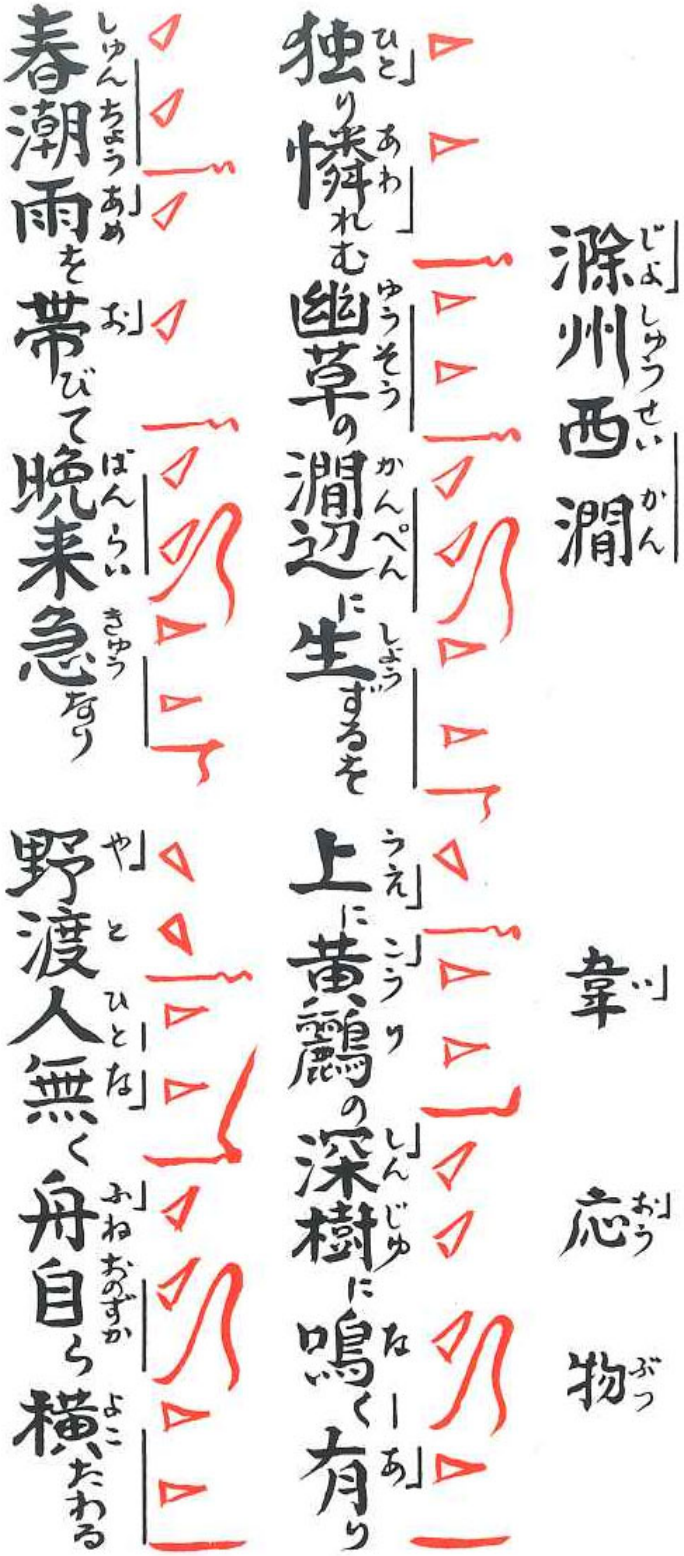

【作者】韋　応物（七三七～８０４年頃？）、中唐の詩人。現・西安の人。玄宗の三衛郎（近衛兵）として仕えた。安禄山の乱で職を失ってから勉学に努め、地方官を歴任した。詩風は王維・孟浩然の流れをくみ、柳宗元とあわせて「王孟韋柳（おうもういりゅう）」と呼ばれている。

【語釈】＊滁州…現・安徽省の滁洲市、南京の西北５０キロメートルのところにある。　＊幽草…奥深い谷に生える草。　＊澗邊…谷川のほとり。
＊黄鸝…こうらいうぐい、日本のうぐいすよりも大形。　＊春潮…春にさしてくる潮、春の増水。　＊晩来…夕暮れになりはじまった。
＊野渡…渡し場。

【通釈】奥深い谷間の草が谷川の辺りに生えているのが愛らしく、茂った木の上にはウグイスがさえずっている。
やがて春になって水かさを増した谷川は、雨の中、夕方から流れが急になってきた。渡し場には人影もなく船だけが横たわっている。

【鑑賞】第一句の「幽草」は、才能があるのに認められない作者自身の、第二句の「黄鸝」は、弁舌にたくみで高い位についている小人のたとえとなる。
そして作者は第三句で、春の増水に混乱した世相を暗示し、第四句に至って、この乱世を救う大人物が現れない嘆きを詠じて結ぶのである。